

『排蘆小船』の発見

さて、『排蘆小船』をめぐるのは、いささか劇的な物語がある。この劇は意図的に演出されたきらいがあるのだが、まずは facts を見ていこう。

まず、『排蘆小船』という書物は、宣長が「生前、堅く他見を禁じたため、その没後も長らく秘筐^{ひきょう}の底に眠ったままで、ほとんど人の眼に触れることがなかった。」(『新編日本古典文学全集 82 近世随筆集』、「解説」、p.485) ものである。

『排蘆小船』という書物は、名前だけは有名だが、上の事実は周りの専門家に聞いても案外知らないようである。

しかし、小林秀雄の『本居宣長』も、

宣長は、京都留学時代の思索を、「あしわけ小舟」と題する問答体の歌論にまとめたが、この覚書風の稿本は、筐底に秘められた。稿本の学会への紹介者佐佐木信綱氏によれば、松坂帰還(宝暦七年)後、書きつがれたところがあつたにせよ、大体在京時代に成つたものと推定されてゐる。(pp. 120-121)

と、佐佐木信綱が学会で紹介して知られるようになったことに触れている。その文章は、佐佐木信綱著「排蘆小船と宣長の歌論」(『賀茂真淵と本居宣長』、初版は1917年=大正6年、広文堂書店刊。増訂版は1935年=昭和10年に湯川弘文社刊)である。

ところで、小林『本居宣長』の記述には、佐佐木信綱の文章の出典が明記されていない。『本居宣長』は、小林一流の文体的晦渋さに加えて、膨大な資料を踏まえられて書かれているため、きわめて難解な書物に仕上がっている。読者が理解しつつ読むためには専門家並みの知識を要する。私もこれまで国文科の院生、フランス文学研究者で宣長論に興味のある方二人に本書を薦めたが、いずれも読了していなかった(相当に著名な方だが)し、また、その後も読了にいたっていないようだ。一人の方は、「助け舟」がないと読める本ではないと私に言ってきたのである。

閑話休題、恐らく、小林は、「古書」に親しむことが古学であるという宣長の実践を模倣履踐して(小林のこだわる言い方に従えば「もどいて」)いるのであろう。小林がその著述において、本書ほど文献を渉猟しつつ実証にこだわったことは類を見ないのである。しかし、それは、宣長の見た地平を観るためには適切な行き方だったのだろう。また、このこと自体、小林の宣長論の要諦に関わる独立した問題系にかかわるだろう。

ともあれ、『排蘆小船』が大正期に発見された書物であるということは、名前のみことごとく知られている嫌いがある小林の宣長論を少なくとも120ページまで読み進めていけば分かることだ。同時に、宣長がこの書を秘めて他見を許さなかった理由については小林の説明が一頭地抜いた深さをもっていることだけを記しておく。

さて、上記の「排蘆小船と宣長の歌論」である。

『排蘆小船』は、大正5年8月、佐佐木信綱が本居清造氏（当時の松坂本居家五代当主）から閲覧を許されて、初めて見たということになっている。そして、佐佐木はその一部を翻刻し、解説と論考を付して「排蘆小船と宣長の歌論」と題して、学界に紹介した。

ここに至って初めて、後の歌論『石上私淑言』や源氏物語論『紫文要領』のもととなる発想や命題を豊富に含んだ宣長の「処女作」が広く知られるようになった。

たしかに facts だけを見れば、佐佐木信綱による『排蘆小船』の学会への紹介という出来事は、新しい文献の発見による宣長研究の進展の促進という純粋に学問的な出来事にしか見えない。

ところが、この『賀茂真淵と本居宣長』という書物はなかなか歴史的な作品で、他に有名な「松坂の一夜」という文章を載せている。この文章は、67歳の老大家・真淵と34歳の俊英・本居宣長の出会いのその時をたった一行の日記をもとに思い描いた創作であり、まさにこの出会いが『古事記伝』の執筆を緒につかしたという印象を後世に刻印定着させた物語なのである。

「排蘆小船と宣長の歌論」という点は、「松坂の一夜」というもう一つの点と照らしあっているのであり、点と点とは自ずからつながって、「国学の系譜」という線を描き出すことになる。

「松坂の一夜」については次稿でまとめることにする。

2020年3月27日 研究代表者 西澤 一光